

〈研究ノート〉

清朝乾隆時代北京崇文地域の宗教建築の分布と景観

——「乾隆京城全図」の分析から——

張 旭

I. はじめに

1. 北京の現状と問題の所在

中国が改革開放政策を実施してから 36 年が経過した。この間、都市の発展はきわめて急速であった。首都北京は規模を年々拡大し続け、今や総人口 2000 万人を超える大都市となった⁽¹⁾。一方、急速な発展に伴い、人口、交通、環境、都市計画などで多い問題が発生している。1950 年代の北京改造計画では、市街地への拡大に伴って旧城壁、城門、甕城⁽²⁾、牌楼⁽³⁾などが取り壊された。清華大学の建築学者梁思成はこの伝統的景観の破壊に対して反対の意見を提出した。残念ながら当時の行政は梁の意見書を採用せず、東南角楼（東便門）と明時代に築造された城壁の一部のみを残して、すべてを撤去された。のちに永定門は復元されたが、違和感がある。1990 年代から現在までについては、北京の胡同⁽⁴⁾は徐々に消失し、地名に反映してきた歴史建築物も消失している。

歴史的建築物は都市の歴史と文化を反映する重要な要素である。幸い、このような思いを持つ研究者は少なくない。北京大学の歴史地理学者侯仁之は、『北京歴史地図集』⁽⁵⁾を編著する際に、北京の歴史建築物に関する多角的な情報を収集し、北京の歴史建築物の概観と現存状況を全面的に把握しようとした。清華大学の建築学者呉良庸は北京の「南鑼鼓巷旧城区改造計画」の中で、南鑼鼓巷の本来の街区を破壊せずに、歴史建築物の修復と居住環境の改善を実行できる構想を示している⁽⁶⁾。これは今後の旧市街地の改造計画のモデルになると考えられる。

中国の都市にみられる歴史的建築の中で、宗教建築は重要な位置を占めている。巨大な廟宇や伽藍建築は都市景観要素の中で大きな意味を持っている。大規模な宗教建築は国家祭祀と緊密に結びつき、小規模なものは庶民の生活空間の中で重要な位置を占めるものである。近年の急激な北京の都市開発によって宗教建築が消失していったが、現在でもなおかなりの数の大小の宗教建築が残っている。そのため、宗教建築を中核とした景観の復原研究は有意義なものとする。

以上のような問題意識から、本稿では乾隆時代（1736 年～1800 年）の北京崇文地域の宗教建築の分布と景観を研究対象とする。崇文区は外城の東半分に位置する。明、清以来崇文区は外来人口（北京以外の省から来た人々）の集住地であり、商業の街、庶民の街といつてよい。祭祀関連の宗教施設が集中する北京でもとりわけ重要な地域である。

分析方法としては、当時の極めて精緻な地図である『乾隆京城全図』から、宗教施設の分布を分析し、景観の特徴、差異、関連および成因を明らかにする。次稿以降では現在の行政区画であ

る宣武区、東城区、西城区を同様の手法で分析することを予定している。

2. 研究対象地域の概観

北京は、遼、金、元、明、清五つの時代の首都であった。明朝の嘉靖 32（1553）年に城南外城の増築がはじまり、嘉靖 43（1564）年に完成した。この期間に内城と外城区分され、北京城の原型が形成された⁽⁷⁾（図 1）。面積約 62 km²、内城に 9 門、外城に 7 門ある⁽⁸⁾。当時北京城は 36 坊に分かれる。このうち内城は 28 坊、外城は 8 坊で、いずれも、東、西、南、北、中の五城に分けて管理された⁽⁹⁾。

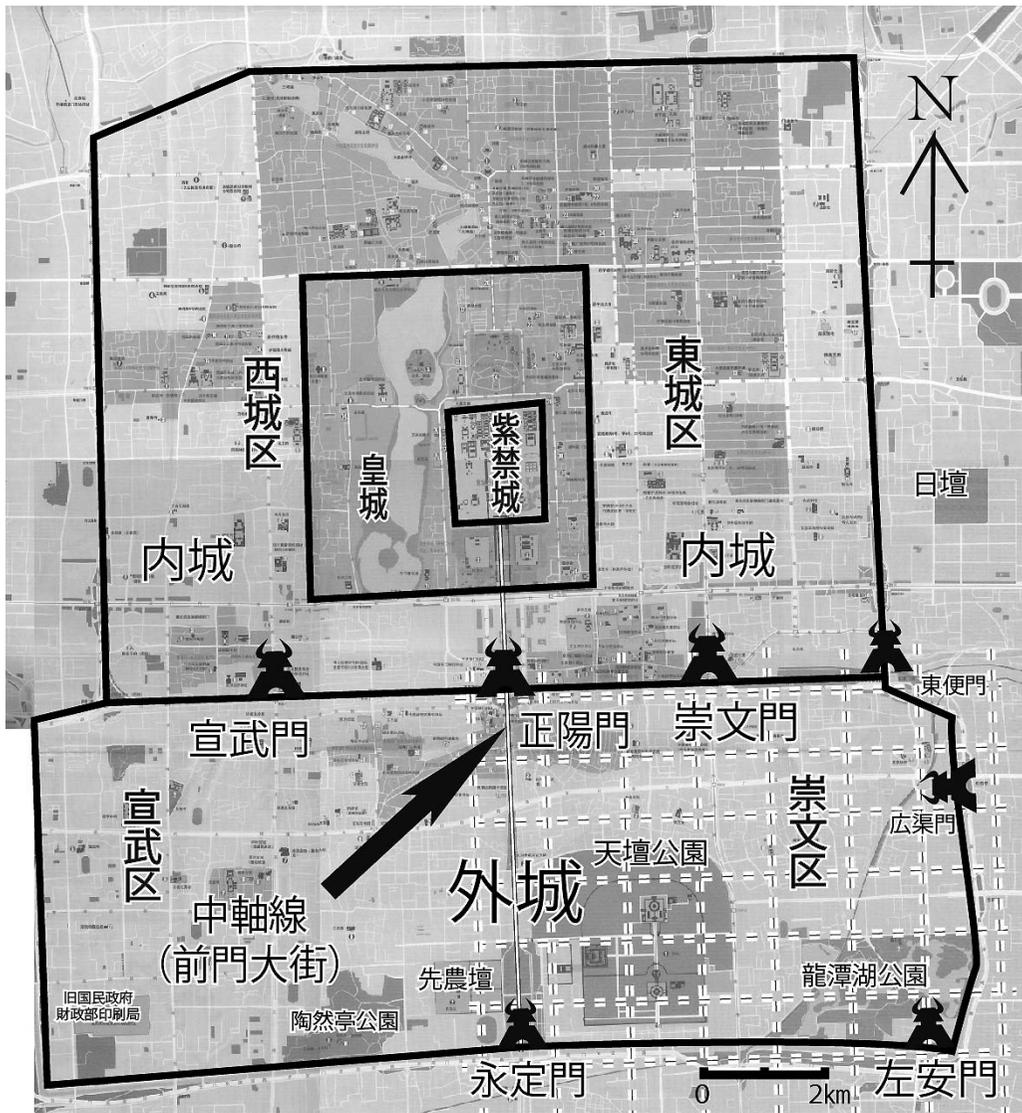


図 1 清代の北京城の範囲
（『北京古建築地図集』2009 に基づいて筆者加筆）

清朝も北京を首都としたが、北京城の基本的構造は以前に比べて基本的に変わらなかった⁽¹⁰⁾。清代の初期に内城は坊が廃止され、満民族のみが居住することができる領域と定められ、八旗に分けて管理された⁽¹¹⁾。外城へは内城に住んでいた漢民族の官僚や商人や一般庶民などが移住した。明代の8坊は東、西、南、北、中の五城に統合された。

1949年1月31日、北京は解放されて、中華人民共和国の首都として行政区画も重大な改変が行われた。1949年2月、北京市の内城、外城の区画は12区に決められた。1950年5月、北京市内、外区は12区が9区に改められ、1952年9月1日には再び7区に改められている。1958年、北京内城は東城区と西城区に、外城は崇文区と宣武区となった。その後、北京の中心市街地は拡大され、この4区の周辺にさらに4区（朝陽区、豊台区、石景山、海淀区）が設けられた。2010年7月1日、崇文区は東城区に合併され、宣武区が西城区に合併され、北京の中心市街地は2区のみで構成されることになった。現在、北京は中心市街地が2区（東城区、西城区）、近郊が4区（朝陽区、豊台区、石景山、海淀区）、郊外は10区画または県（門頭溝区、房山区、通州区、順義区、昌平区、大興区、懐柔区、平谷区、密雲県、延慶県）からなる。

以上述べたように北京城の区画は各時期によって違うことがわかる。そこで、筆者は図1のように1958年から2010年7月1日までの北京市区の行政区画に基づいて北京市区を東城区、西城区、崇文区、宣武区の4区分で検討をすすめる。本稿ではまず崇文区をとりあげる。

II. 乾隆時代の北京

1. 北京の宗教環境

乾隆時代の北京城には、仏教、ラマ教（喇嘛教）、道教、イスラム教、民間宗教など様々な宗教施設が存在していた。それぞれの外観や規模、おいてかなりの差異がある。

清朝はチベット仏教を信奉するが、仏教に対しても熱心に崇敬して保護措置をとってきた。僧侶と寺院を管理する官制は、明代と同じように京城において僧録司を設置し、左善世、右善世、闡教、講経、覚義の5官職が全国の仏教事務をおこなっていた⁽¹²⁾。この時代、出家する僧侶道士の人数と寺院、宮観の建設に対しては厳しく規定されていた。宗教建築は新築が禁止され、出家人は国家から直接に度牒（身分証明書）を渡され管理されていた。違反者に厳しく罰せられ、寺院と観宮の建設材料も没収された⁽¹³⁾。

清朝の支配階層はラマ教を信仰していた。ラマ教の制度も極めて厳密に規定されていた。表1は当時北京各ラマ廟のラマの職名と定員数である。

この表1⁽¹⁴⁾のように一つのラマ廟の管理職の定

表1 北京チベット仏教のラマの職名と定員数

職名	定員数
掌印扎薩克達ラマ	1
副掌印扎薩克達ラマ	1
扎薩克達ラマ	4
達ラマ	14
副達ラマ	3
畫仏達ラマ	1
額設蘇拉ラマ	10
教習蘇拉ラマ	6
額外教習蘇拉ラマ	4
倉蘇拉ラマ	9
公缺徳木齋	31
格斯貴	50
合計	134

（ラマを使用するのは文献に基づく）

員は 134 名であることがわかる、管理職を担当するラマにおいて該当ラマ廟以外の人員は雍和宮から 11 名、嵩祝寺、弘仁寺から各 4 名、東黃寺から 3 名、慈佑寺から 2 名、あとは他の 16 のラマ廟から各 1 名を選んでいる。一つのラマ廟の管理層のおよそ 3 分の 1 は別のラマ廟から来たものである。その中で雍和宮からのラマが最も多い。雍和宮は雍正帝が皇位を継承する以前の邸宅で、雍正帝擁立後ラマ教の寺に変更された。当時北京のラマ教の中樞機能を果たし、勢力がいはばんだ大きなラマ廟である。雍和宮は、北京最も規模が大きなラマ寺となった。

清朝は道教に対しても崇敬していた。道教への管理と官制は、仏教と同じように、明代の制度を継承していた。北京に道録司を設け、全国の道教事務を管理し、左正、右正、左演法、右演法、左至靈、右至靈、左玄義、右玄義という計 8 官職を各 1 名配置した⁽¹⁵⁾。『北京市志稿』（宗教志）によると、道教は仏教と同じように厳しい出家制度に従っていた。本業に精進する道士は朝廷から「真人」の称号が与えられ、乾隆時代になると官職まで授けられた⁽¹⁶⁾。北京の道教施設には宮觀のほかにも廟がある。たとえば、花市大街 32 号の火神廟は神木廠悟元觀下院という。規模の大きな本院の下にはたくさんの別院が付属する。道教は中国在来の信仰なので、その別院は分布範囲が広く、最も地元の庶民の生活場に近い。本稿では、このような別院を民間廟祠の中に分類している。

清代はイスラム教に対しては崇敬したわけではないが、他の宗教や信仰と平等な地位を与えた。康熙、雍正時代には北京にあるイスラム教いわゆる回教と回民に対する非難の声が大きかった。回教は異教であり、回民は乱暴な民衆で、朝廷や法律に逆らい、厳しく罰せられるべきであるという差別的言論が続々現れた⁽¹⁷⁾。しかしながら、康熙、雍正時代には皇帝が回教を保護し、回民族と他の民族とは融和すべきと勅命を下した⁽¹⁸⁾。歴史が最も古い清真寺（イスラム教寺院）は、牛街清真寺で創設は北宋の太宗時代（939～997）である。明代にもいくつかの清真寺が建てられ、清代は北京城外にも多数造られたが、北京城内は清真寺の増加はなかった。他の宗教施設と比較すれば、清真寺の数はわずかである。

清代には民間宗教も繁栄した。北京は仏教、ラマ教、道教、イスラム教があるため、民衆が各宗教の教義と信仰の儀式を吸収して、崇拜する人物を神格化して様々な民間信仰が誕生した。たとえば、信義を代表する人物関羽は民衆崇拜され、商人は関羽を守護神と見なすようになった。さらに、薪を貯える倉庫の近くには必ずや火を操る火神を祀る。火神廟の集中地域はかつての薪の倉庫の立地場所と推測できる。ただ、民間廟祠は民衆の要望に応じて自発的に建造されたものが多く規模と敷地面積とも大きくない。

2. 乾隆時代の北京の宗教建築の分類

当時の北京には大乘仏教、ラマ教、道教、イスラム教、儒教、民間宗教があった。宗教建築は合院式、合院式＋八角楼、塔の三種類に分かれる。『乾隆図』をみれば、北京の都市プランは東西南北の正方位の長方形で、中心となる建築は合院式である。多くの寺庵、宮觀、廟祠は合院式で建設された。儒教建築の天壇、社稷壇は合院式で敷地が広く、建築規模が大きいのが特徴である。一方、民間宗教建築は敷地が狭く、建築規模も小さいのが特徴である。また、イスラム教の

清真寺は北京の都市計画に応じて、イスラム風の建築ではなく中国の合院式に変更された。その特徴は八角楼（別称「望月楼」）である（写真1）。この塔があればその建築はイスラム教に属するものと判断できる。

最後に、名称を見れば宗教建築の分類ができる。たとえば、寺、庵は仏教、観は道教、壇、祠は儒教、清真寺はイスラム教の建築である。宮はほとんどの場合が道教だが、雍和宮のようなラマ教もある。廟はほとんどが民間宗教だが、孔子廟、歴代帝王廟のような儒教の場合もある。



写真1 花市清真寺の八角楼
(筆者撮影 2014年2月18日)

Ⅲ. 『乾隆京城全図』の利用

乾隆時代の北京に対する歴史地理研究には、当該時代を示す適当な地図資料の有無が重要な条件となるが、幸いにも清代北京の詳細な地図として『乾隆京城全図』⁽¹⁹⁾（以後『乾隆図』と略称する）が存在する。この地図を用いて乾隆時代北京の宗教建築の分布と景観などを検討できる。

1. 『乾隆図』の作成と内容

『乾隆図』は1750年に乾隆帝が郎世寧を指導者とし、当時の西洋の先進的測量技術を用いて作成した都城図である。この図には、皇城、内城、外城が描かれ、道路、城壁、宮殿、王府などの重要な建築物だけでなく、当時の住宅、店舗、櫓、寺、観、兵舎、倉庫なども詳しく描かれている。建築の向きや建物階数なども知ることができ、大きな建築物についてはその棟の両端に設置された鯨までも描かれている。これは当時最新の製図技術で国力を使って作られた詳細かつ精密な地図であり、当時最高の水準と言っても過言ではない。

『乾隆図』は当時の北京の道路だけではなく、建物の細部まで描かれている。たとえば、一階建や二階建や牌坊や櫓などの建築を一軒、一軒描いている。しかも廟宇、寺庵、観宮、廟祠、官衙、宮殿、兵舎、櫓などの名称が付されている。

この地図は北京故宮博物院文献館に所蔵されている、本稿では乾隆年間の原図は縮尺約650分の1である、それを約2600分の1に縮小し、興亜院華北連絡部政務局調査所が1940年印刷したものが現在流布している。『乾隆図』は、日本では東洋文庫と東洋文化研究所が所蔵しており、国立情報学研究所のウェブサイトからダウンロードできる。このデータベースは北本朝展、貴志俊彦、西村陽子らが作成した「華北・北京歴史データベース」をもとにしている（西村陽子・北本朝展2012）⁽²⁰⁾。筆者はこのダウンロード版を印刷してつなぎ合わせて分析に用いた。この『乾隆図』は203枚のブロックに分けられている。実際の距離と地図上の距離から計測すると、各のブロックの実距離は東西1.5 km、南北1.25 kmであり、地図の縮尺は1:3600となつて

いる。

2. 『乾隆図』についての先行研究

従来、『乾隆図』をめぐる多数の研究が行われてきた。建築史学の分野では陣内秀信、朱自暄、高村雅彦が『乾隆図』を利用して、北京の都市空間と建築の構造を検討している⁽²¹⁾。伊原弘は『乾隆図』を中心に古代建築を研究した⁽²²⁾。また、鄧突、布野修司、重村力は、明、清時代の北京の街区パターンや諸施設の分布を検討した。さらに、内城の寺廟分布について、基本パターン、地区特性の面から寺廟を仏教、ラマ教、道教、イスラム教の宗教施設及び民間信仰のための施設の5種類に分けて検討し、その分布と街区パターンとの対応関係を考察した。しかし、外城の宗教施設及びそれぞれの建造年代、名称、面積などについては言及していない⁽²³⁾。

鄧突、布野修司、重村力は北京内城の居住単位、街区構成を系統的に検討し、とくに寺廟と八旗制度の下の街区構成との総合関係を検討し⁽²⁴⁾、北京城街区構成と尺度を分析して都市計画をめぐる論述している⁽²⁵⁾。鄧突、毛其智は、『乾隆図』の研究を通して北京旧街区の構成の計量的な分析を行い⁽²⁶⁾、李菁、王貴祥は、清代北京城内の胡同と四合院住宅の配置と計画について諸問題を検討した⁽²⁷⁾。李菁は、『乾隆京城全図』中の四合院建築と街坊系統の関係を論じた⁽²⁸⁾。

西村陽子、北本朝展（2012）は「乾隆京城全図」で、古写真を用いた北京の乾隆時代の古景観の復原に言及している⁽²⁹⁾。京都大学地域研究総合情報センター（CIAS）では空間画像史料を用いた「華北・北京歴史データベース」の構築を現在進めている。

3. その他の地図資料について

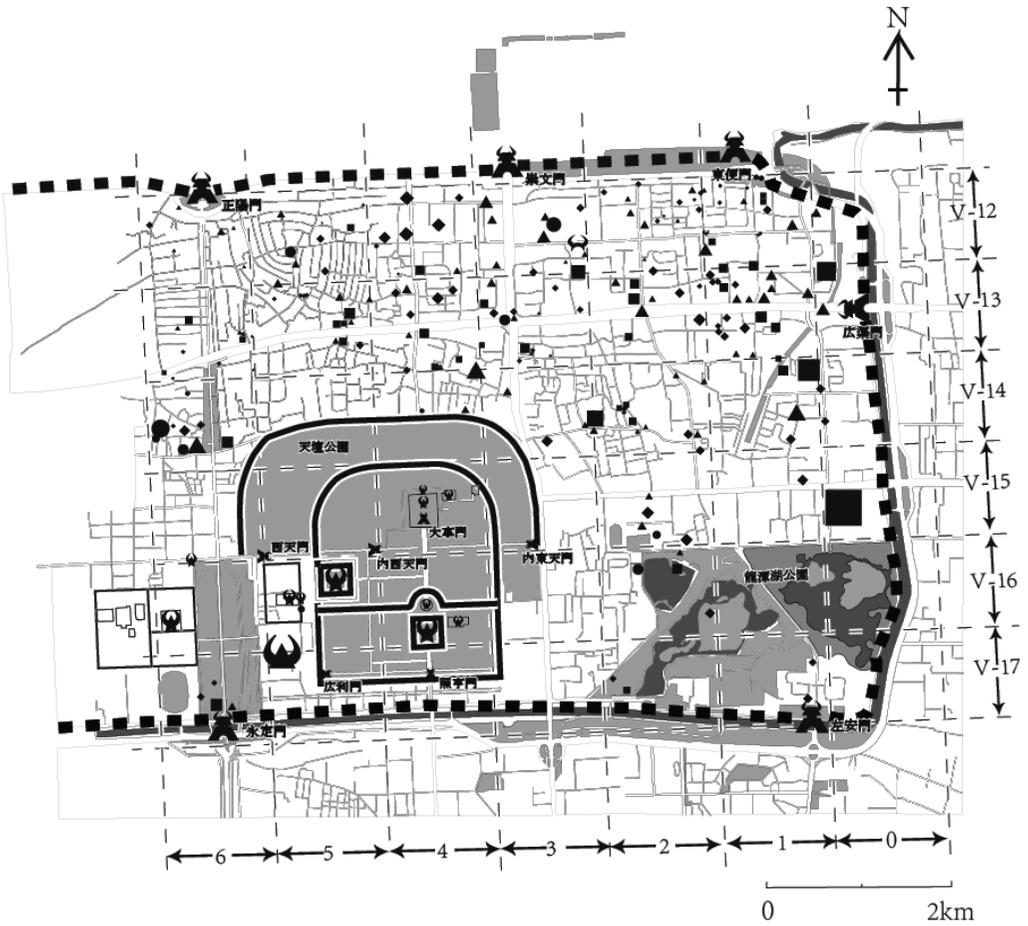
上にあげた先行研究が、参考にしている北京の現在の地図の年代は、2008年北京オリンピック大会以前のものである、オリンピックにともなって、大規模な都市改変がなされ、北京の市街地の道路網や住宅地の広がり大きく変化している。そのため現在の北京と比較するならば最新の地図を用いる必要がある。

そのため筆者は2009年に出版された『北京古建築地図集』⁽³⁰⁾をベースマップとして利用した。この地図集には2008年現在の北京に残る古建築の分布が示されている。この地図集の中には、古建築の分布図だけでなく、それぞれの古建築の概況、写真、所在地等が記載されている。これをもとに、乾隆時代の北京の景観の分布状態を正確に復原することが可能となった。

IV. 崇文地域の宗教施設の分布

1. 崇文地域の位置づけ

崇文地域は、図1のように、外城の東の区域にあった。「崇文」という名称は昔ここに崇文門という城門があったため、1949年中華人民共和国が成立した後、この地域を崇文区と称するようになった。北京は首都としての歴史が長い。特に乾隆時代は、当時の政治、経済の中心、都市の規模も全国最大で乾隆時代の北京の商業の発展は清代では最も大きかった。その中で崇文区は



	城なし	城あり
仏教建築 (寺、院、堂)	■	◐
(庵)	◆	◑
道教建築 (觀、宮、祠)	●	◒
儒教建築 (宮、殿、壇、 宇、所)	★	◓
回教建築 (札拜寺)	☾	◔
民間信仰 (廟、殿) 建築	▲	◕
城門建築		◖
緑地	■	— 壁
水域	■	— 道路
集中分布 地域	◻	- - - 区画の線
城壁	—	—

凡例の各建築の印は、筆者が『乾隆京城全図』の縮尺を参考し、それぞれを計って比率的に拡大、縮小して、各宗教建築の敷地の面積の大小を表現している。

図2 清代の北京城の範囲
 (『北京古建築地図集』2009の地図上に「乾隆図」の宗教建築を記入)

商業が最も卓越する地域であった⁽³¹⁾。北京周辺地区の商人は上京して正陽門大通りに沿って店舗を開くことが多かった。図2のようにこの地区の道路は重要な大通りが東西南北の碁盤目状に走っているが、その内部の道路は迷路状である。歓楽街と商店街はこの混沌とした内部道路網の中に存在した。この地区では外来人口の増加と商業の繁栄に伴い、図2にみられるように道路網の中に、民間の庵（◆）、祠（●）、廟（▲）が多数設置された。また、この地区には天を祭祀する場所である天壇が所在している。儒教の廟宇も数多く集まり、崇文区の西南角に広い面積の土地を占めている。

2. 当時の宗教建築の分布状況

『乾隆図』と『北京古建築地図集』を利用して、清朝乾隆中期の北京外城東南地域の宗教建築、城門の分布図（図2）を作成した。崇文地域全範囲を東から西に7等分し、南から北に6等分して42のエリアに分けている。次に、宗教建築の各種についてエリアごとに述べる。

各エリアにある寺（■）の数は図3に丸囲み番号で表している。仏教の寺（■）はほとんど



図3 仏教廟、儒教廟宇、道教宮觀、イスラム教清真寺の分布
 (凡例は図2と同じ、①～⑤は仏教廟数を示す)

V-13 のエリアで東西走っている大通りに沿って分布している。

儒教廟宇 (★) はエリア V-15 の 4 列目、V-16 の 4, 5, 6 列目に分布している。ここは皇帝が天を祭る天壇である。

道教宮観 (●) と清真寺 (☉) は交差点やと居住区の辺縁に位置している。

図 4 に示したように仏教の庵 (◆) はほとんど V-12, V-13, V-14 のエリアに分布しているが、破線で囲んだ範囲は特に多い地区である。これらの地区は V-13 エリアで東西走っている大通りの北側の居住区にある。

民間廟寺 (▲) はエリア V-12, V-13, V-14 と V-15 の 2 列目と V-17 の 5, 6 列目に分布している (図 5)。ほとんどが天壇公園と龍潭湖公園以外の居住区の中にほぼまんべんなしに分布している。

それぞれのエリアにおける宗教建築を集計し、種類によって分類し、また、各々の宗教建築の位置を確定した後、筆者は『乾隆図』を利用してそれぞれの面積をものさしで計って測定した。表 2 は各エリアにおける宗教建築の数と名称及び面積の計測の結果である。図 3 と表 2 による

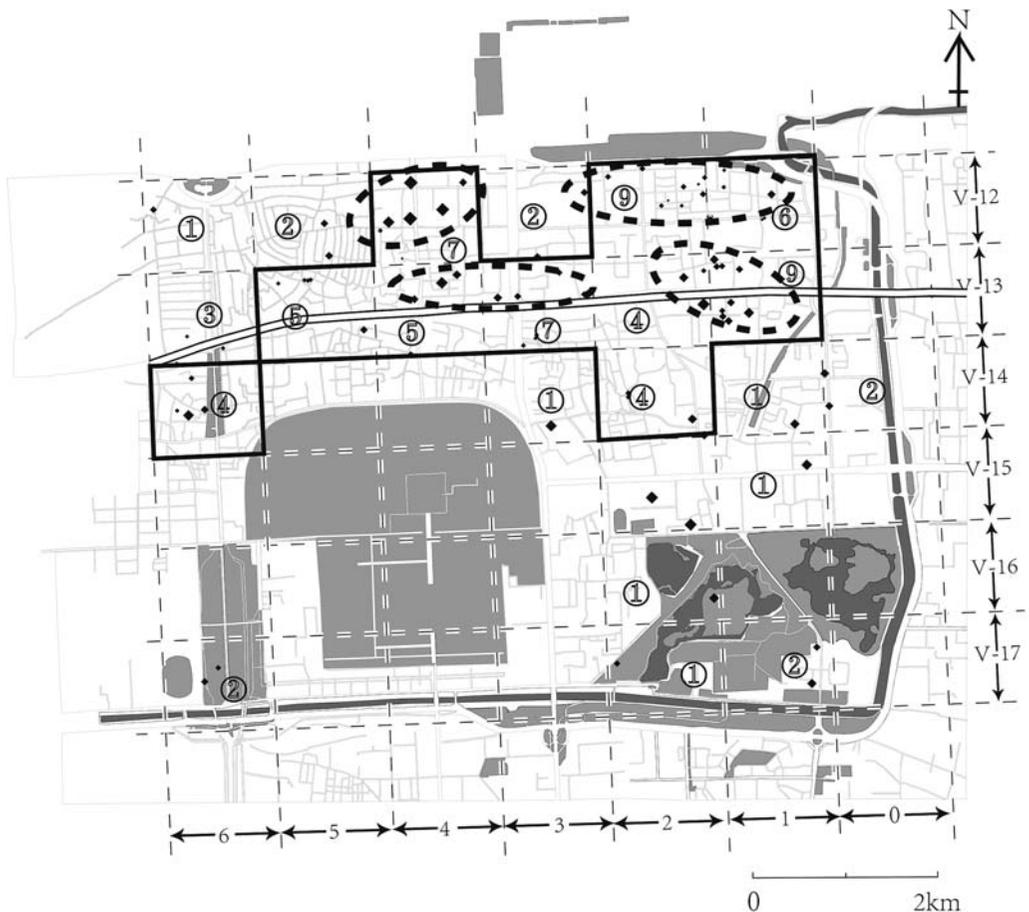


図 4 仏教庵の分布の特徴
(凡例は図 2 と同じ、①～⑨は仏教庵数を示す)

と、仏教の寺の多くは該当地区の大通りに沿って位置している。寺の数は39カ所だが、面積は498,784 m²に達している。というのは、寺はいつも仏教の中で本院として建てられ、広大な土地を利用するため大通りに沿って立地する傾向がある。

儒教廟宇の多くは該当地区の西南に位置している。というのは、ここは天壇が存在するからである。建築規制で豪壮な建築を象徴すると考えられる鯨は、儒教廟宇にしか見られない(図2)。儒教廟宇は崇文地域には数が少ないが、面積とは179,496 m²非常に大きい。儒教を重視する当時の皇帝は他の宗教建築よりも大規模な儒教廟宇を建設したと推測できる。

道教宮観とイスラム清真寺は該当地域の交差点や居住区の辺縁地帯に分布している。数は少ないが、道教宮観は1当り平均3445 m²であり、清真寺は10,108 m²である。仏教の寺は12,789 m²でやや大きい。仏教の庵はわずか1631 m²、儒教廟宇は16,317 m²、民間廟祠は2173 m²である。道教宮観の1軒当りの平均面積は民間廟祠と仏教の庵より上回るが、他と比べれば小規模な宗教建築といえる。清真寺は該当地域で1カ所しかないが、10,000 m²を超えた大規模な宗教建築と



図5 民間廟祠の分布
(凡例は図2と同じ、①～⑥は民間廟祠数を示す)



写真2 大享殿



写真3 齋戒宮



写真4 清真寺



写真5 隆安寺



写真6 法華寺



写真7 袁崇祠

(いずれも筆者撮影2014年2月18日)

言えるであろう。

仏教の庵の多くは該当地域の大通りの北の居住区に位置している(図4, 表2)。庵の数は82で、面積は133,744 m²にすぎない。庵の数は寺の2倍以上だが、総面積は寺の3分の1弱に相当する。かつて中国社会には女子が貞節を守る意識が強く存在し、夫が世を去ると庵で尼になる例が多い。居住区に多数の庵があり、庵の数は多いが、各々の面積は狭く、男尊女卑の意識がなお強いことが分布パターンからも推測できる。

民間廟祠の多くは天壇と龍潭湖以外の居住区に位置している。民間廟祠の数は73だが、面積が158,654 m²である。庵の数とほぼ同じだが、総面積は少し上回る。しかし、庶民が自発的に建設したため、1軒当りの平均面積は非常に小さい。

3. 『乾隆図』の宗教建築の残存度

乾隆時代の北京には1000以上の宗教建築が存在していた。しかし、過去の都市計画により宗教施設の統廃合は著しく北京の都市景観は大きく変化した。

崇文地域には仏教、民間宗教、儒教、道教、イスラム教の建築が計217カ所分布していた。儒教廟宇はすべて今なお保存されている。先農壇と天壇の大享殿(写真2)、皇乾殿、神庫、皇穹宇、円丘壇、犠牲所、齋戒宮(写真3)、神楽所、凝禧殿である。崇文区唯一の清真寺(写真4)も現存する。

一方、仏教の寺院は総数39カ所であったが、現在は積善寺、隆安寺(写真5)、夕照寺、法華寺(写真6)、佑聖寺、観音寺の6ヶ所しか残っていない。積善寺は正殿だけが残り、隆安寺は修復作業を実施している。夕照寺は財団によって修復され、すぐ隣にホテルを建て、今の夕照寺

はこのホテルの一部になり、中国の伝統文化の展示館になった。法華寺は一般の住宅になり、3世帯がここに住んでいる。佑聖寺と観音寺は廃され、建物だけが残されている。仏教の庵は総数82であるが、現在はすべて消失した。一方、道教宮観は総数13カ所であるが、すべて消失した。

民間廟祠は総数73カ所であるが、薬王廟、火神廟の2カ所しか残っていない。薬王廟は現在高校の校舎として使用されている。筆者が調査に行ったとき、ちょうど保存修復中であった。火神廟は現在崇文区図書館として使用されている。関帝廟は現在石碑だけが残る。碑面には関帝廟の建設年代と面積と部屋の数記録されている。袁崇煥祠（写真7）は明の名将袁崇煥を祭る祠である。清朝の軍隊に抵抗した袁崇煥は、清朝にとって敵であるので祭ることが禁止されたが、庶民は隠れて信仰していた。そのため『乾隆図』には袁崇煥祠は表記されなかったと推定される。1782年乾隆帝により袁崇煥の名誉回復をする勅命が下された。

以上述べたように崇文区の宗教建築保存の状況は、儒教廟宇とイスラム教の清真寺及び一部の寺院と民間廟祠は残っているが、仏教庵と道教宮観が都市開発によってすべて消失している。一方、儒教廟宇が名所として保存されたが、昔の祭祀の役割はない。同様に仏教の寺院もホテルや住宅として使われている。民間廟祠はほとんど消失し、残っている建築は学校も図書館に使われている。しかし、本区には一軒しかないが、イスラム教清真寺だけは未だにアホン（イスラム教僧侶）が住み、宗教施設と信者の集会所としての役割を果たしている。

儒教廟宇の写真を見ると建築の壮かさ、赤色の壁、青色と緑色の瑠璃瓦、棟の両端に立つ大きな鯨がその特徴となっている。一方、仏教寺院と民間廟祠の写真を見ると灰色の壁、瓦屋根、柱だけが赤色であることがその特徴である。儒教を崇敬する清朝の統治者は社会階層によって、服装の様式、建築の様式と規模、装飾の数と種類などの厳しい規則を設けた。このように建築景観は多様化への方向性が抑えられた。換言すれば儒教の「等級思想」は各宗教建築の景観の差異形成に影響するほどの力を持ったと考えている。

V. おわりに

本稿では、Iで研究方法、研究史に言及し、IIで乾隆時代の北京の宗教環境及び宗教建築の分類を説明した。次にIIIで、『乾隆図』の宗教建設分布を分析し、崇文地域を事例としての宗教建築の景観の対照を試みた。最後に、宗教建築の分布の特徴と景観の特徴の形成の原因を考察した。

乾隆時代北京の崇文地域では、儒教廟宇は数少ないが、崇文地域の面積の4分の1を占める。また、儒教廟宇は北京の中軸線の南端建設されたことが明らかになった。そして、崇文地域の仏教寺院はほとんど重要な道路に沿って建築されたが、数量では最も多い庵は、居住区の街中（胡同）に散在している。崇文地域の宗教建築の平均面積は、儒教廟宇、仏教寺院、イスラム教清真寺、道教宮観、民間廟祠と仏教庵の順に狭くなることが明らかになった（表2）。

一方、乾隆時代の北京崇文地域にみられる宗教建築については図2に示したように儒教廟宇の

周辺の緑地の面積が広いが、他の宗教施設は街の中に分布して緑地がみられない。また、写真から見ると、儒教廟宇の建築は豪壮で他の宗教施設の建築が地味である。儒教の「等級思想」は他の宗教の建築にも影響を与えていると考える。

過去の北京城に対する研究は、主に都市計画、空間構造、及び建築様式について注目してきた。前二者の研究は都市全体を論じる。建築様式の研究については建築個体に対して論じる。そして、北京城の歴史地理地図集は1980年代には整えられていたが、未だ分析が十分ではない。

本稿は、北京城内の『乾隆図』に描かれた宗教建築を『北京古建築地図集』（2009）上に落として、宗教別に建築群の分布と面積を整理した。これは、各宗教信仰の普及程度と深い関係がある。本稿では、乾隆時代北京の崇文区地域についてのみの分析であるが、今後、同じ手法で、宣武区、東城区、西城区の宗教建築の分布特徴と形成の原因を明らかにし、北京全体の分布状況を捉えたいと考えている。

【付記】『千里地理通信』関西大学地理学研究会会報第70号（2014）年に掲載された研究ノート「清乾隆中期（1750年）北京にみられる宗教建築の分布とその実態」を大きく発展させた論考である。

注

- (1) 北京市統計局2014年のデータによる。
- (2) 城門を守るために城壁で囲まれる小さな区域。
- (3) 街の両端に設置する柱で支える楼閣である。街の名前などを明記する。
- (4) 北京の旧市街地の不規則な街区。
- (5) 候仁之『北京歴史地図集』、北京出版社、1988。
- (6) 呉良壚『北京旧城と菊兒胡同』、中国建築工業出版社、1994。
- (7) 周家楣・繆荃孫『光緒順天府志』、1886（北京古籍出版社による排印本1987、ページ数はこれによるp.3。）
- (8) 前掲(7)、p.3。
- (9) 候仁之『北京歴史地図集』、北京出版社、1988。
- (10) 前掲(7)「京師志十三坊巷上」、p.333。
- (11) 前掲(7)「京師志一城池」、p.2。
- (12) 北京市地方志編集委員会『北京市志稿 宗教志 八』北京燕山出版社、1998、p.27。
- (13) 前掲(12)、p.27「凡僧不給度牒、私自簪雍者、杖八十……至于寺觀庵院……不許私自創建增置、違者杖一百、僧道還俗、發刃遠從軍、尼僧女冠入官為奴、地基材料入官。（訓読）凡そ僧は度牒を給せず、私に自ら簪雍せる者は、杖八十……寺觀庵院に至りては……私に自ら創建増置する許さず。違う者は杖百、僧道は還俗するものは、刃遠に發して軍に従わして。尼僧の女冠するものは官に入れ奴と為す。地基材料は官に入る。」
- (14) 蘇良桂編『北京市志稿 宗教志 八』、北京市修誌処、1938、p.183。
- (15) 前掲(14)、p.275。
- (16) 北京市地方志編集委員会『北京市志稿 宗教志 八』、北京燕山出版社、1998、p.275「凡持修精進者、賜以真人之号。……乾隆十二年議定、秩視太医院院使、為正五品、令其世襲。（訓読）凡そ持修精進する者は、賜うに真人の号を以てす。……乾隆十二年議定す、秩太医院の院使を視て、正五品と為して、其れ世襲せしむ。」
- (17) 北京市地方志編集委員会『北京市志稿 宗教志 八』、北京燕山出版社、1998、p.306。「回民自為一

- 教，異言異服，其強悍刁頑，肆為不法，請嚴加懲治約束（訓読）回民自ら一教為り，異言異服にして，其の強悍刁頑なり，肆いままに不法を為す。請うらくは厳しく懲治約束を加えよ。」
- (18) 吳廷燮・蘇良桂『北京市志稿 宗教志 八』，北京市修誌処，1938，p.307。「朕念万物一体之義，豈忍視回民於衆民之外？（訓読）朕は万物が一体の義を念ずれば，豈に回民を衆民の外に於いて視るに忍ばんや。」
- (19) 『乾隆京城全図』興亜院華北連絡部政務局調査所編，1940年。他に，撮影印刷されたものに『清内務府藏京城全図』（1940）がある。加筆修正されたものに『摹繪乾隆京城全図』（19世紀末），『加摹乾隆京城全図』（1996）がある。
- (20) 西村陽子・北本朝展「『乾隆京城全図』と古写真を用いた北京古景観の再現」（HGIS 研究協議会編『歴史 GIS の地平景観・環境・地域構造の復原に向けて』，勉誠出版，2012。）
- (21) 陣内秀信・朱自暄・高村雅彦『北京都市空間を読む』，鹿島出版会，1998。
- (22) 伊原弘『新版「乾隆京城全図」について（上・下）』，東方書店，1996。
- (23) 鄧奕・布野修司・重村力「北京内城における寺廟の分布に関する研究」，『日本建築学会学術講演概集（関東）』，2001。
- (24) 鄧奕・布野修司・重村力「乾隆京城全図（1750）にみる居住単位に関する考察」，『日本建築学会計画系論文集』第582号，2004。
- (25) 鄧奕・毛其智「從「乾隆京城全図」看北京城街区構成与尺度分析」，『城市规划』第27卷，10期，2003。
- (26) 鄧奕・毛其智「北京旧城社区形態構成的量化分析－對「乾隆京城全図」的解讀」『城市规划』05-0061-07，2004。
- (27) 李菁・王貴祥「清代北京城内的胡同与合院式住宅－對「加模乾隆京城全図」中「六排三」与「八排十」的研究」，『世界建築導報』，2006。
- (28) 李菁「乾隆京城全図」中的合院建築和街坊系統研究（中文訳稿）』，『建築歴史与理論』10（首屆中国建築史学全国青年学者優秀學術論文標選獲獎論文集），2009。
- (29) 前掲(20)。
- (30) 胡介中・李路珂・李菁・王南『北京古建築地図集（上）』（縮尺1:46200），清華大学，2009。
- (31) （清）于敏中など編纂『日下旧聞考』第一冊 p.887「今正陽門前棚房比櫛，百貨雲集，較前代尤盛。足徵皇都景物殷繁，既庶且富云。」（訓読）「今正陽門前，棚房比櫛し，百貨雲集し，前代に較べ尤も盛んなり。皇都の景物殷繁にして，既に庶かつ富なりと云う。」，p.887。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程地理専修）